

夏目漱石とクラシック音楽

音楽学者・元東京藝術大学特任教授

瀧井 敬子

(第21回)

漱石が観た男装の女性歌手

明治生まれの希代の実業家、小林一三（1873-1957）は、宝塚歌劇団の生みの親である。

昨年9月、私は宝塚歌劇団の本拠地の大劇場で、月組によるミュージカル「I am from Austria—故郷は甘き調べ—」を楽しんだ。ウィーンで創られて大ヒットした演目を、日本オーストリア友好150周年記念に、宝塚歌劇団用に潤色した公演であった。男役のタカラジェンヌたちは夢の世界の男性、男装の麗人であった。小林一三は、こう語る。

宝塚には男の世界はない。女でなければできない雰囲気があると思っている。…演劇や文筆にあこがれた私の若い日の情熱が、事業家としての夢が、そのまま宝塚歌劇に、宝塚の街に実を結んでいる（『宝塚漫筆』）。

さて明治43年（1910）2月、東京帝国劇場では2日から26日まで、アウグスト・ユンケル作曲のオペラ「熊野」が上演された。「吾輩は猫である」の苦沙弥先生が後架で「平の宗盛にて候…」とよく唸る、あの能の「熊野」に題材を得たオペラである。愛妾熊野の役は柴田（三浦）環、平宗盛の役は清水金太郎。共に東京音楽学校出身の帝劇スターであった。公演中のある日、小林はオペラ「熊野」を観た。西洋式の発声で歌われる日本語に、周りの観客たちはゲラゲラ笑った。

しかし、3階席の東京音楽学校の生徒の一団は違っていた。彼らが言ったあれやこれやの批評か

ら小林は、「オペラの将来が洋々と展げていることを知った」という（前掲書）。これがきっかけとなって、3年余の後の大正2年（1913）7月、宝塚歌劇団の前身である宝塚唱歌隊が結成された。最初の指導者に選ばれたのが、東京音楽学校を卒業したピアニストの安藤弘と声楽家の妻、千恵子（千笑子）であった。弘は歌劇に対して理想を持っていた。夫人の父親は三井物産の重役であった。

夏目漱石のことに話を戻そう。彼はオペラを1度も観ていない。オペレッタは2度観ている。大正2年2月の帝劇公演「マスコット」では、弟子の二宮行雄が翻訳をしていた。大正4年9月に5日間だけ行われたスッペ作曲「ボッカチョ」は気に入ったようで、「帝劇の喜歌劇は、綺麗だから御嬢さん連れて行つてやりたまへ、然し今晚かぎりかも知れないからもう駄目かも知らん」、と寺田寅彦に知らせている。最終日であったのだ。主役の詩人ボッカチョは、のちに国際的なオペラ歌手となる原信子が男装して熱唱した。彼女も東京音楽学校の出身者であった。

ところで、新型コロナウイルスはまだ終息しない。1348年、イタリアのフィレンツェでペストが大流行した。ボッカチョ（1313-1375）の『デカメロン（十日物語）』は、1348年から53年にかけて書かれた。感染を避けて別荘に籠もった男女10人が一人10話ずつ物語る趣向になっている。